

CONTENTS

- 2 福音のラッシュ イ・ヨンフン牧師
- 4 今日のマナ チョウ・ヨンギ牧師
 - ・器
- 6 メッセージ 志垣重政牧師
 - ・愛の実践
- 10 大きな図で世界を読む キム・ジョンチョル監督
 - ・マルティン・ルターとヒトラー、そしてユダヤ民族の受難 (1)
- 19 ユ・ジョンオク牧師婦人の信仰物語.....
 - ・花のない遺体安置所
- 25 靈的リーダーシップ イ・ヨンフン牧師
 - ・ゆるしの奇跡
- 29 読み直す手紙 デ・チョンドク神父
 - ・私たちはどうして神様の御旨を悟れないのでしょうか？
- 35 イ・チョルファンの幸福
 - ・コミュニケーションの秘密
- 38 レビ記ライフ カン・デウィ 牧師
 - ・八日目の秘密

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 2021 年 10 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

福音のラッシュ

イ・ヨンフン牧師

カリフォルニアはアメリカで人口が一番多い州だけではなく、経済規模も大きく、州のGDPはイギリスやフランスのそれよりも高いものとなっています。このようなカリフォルニアの発展は19世紀半ばから始まりました。1848年、カリフォルニアに住んでいた大工ジェームズ・マーシャルが水車を修理していると、純度96%の砂金を発見しました。これをきっかけに、「カリフォルニアでは砂金が見つかる」という噂がアメリカ国内だけでなく、海外にまで広まり、大勢の人がカリフォルニアに押し寄せました。

金を求めて採掘者が殺到した当時のことは「ゴールドラッシュ」と呼ばれています。ゴールドラッシュを機に、カリフォルニアは短期間に人口増加と経済発展

を成し遂げ、州として承認されます。カリフォルニアの発展物語から、福音が広まり神の国が拡大することを連想しました。黄金の発見を聞いて大勢の人がカリフォルニアに殺到したように、福音を聞いて、信仰を失っていた人々が神様を探す「福音のラッシュ」を期待します。黄金は人に物質的な富をもたらすだけですが、福音は人の魂を生かして、肉体をいやすなど、すべてのことが祝福されます。

詩篇の作者は、「地のはての者はみな思い出して、主に帰り、もろもろの國のやからはみな、み前に伏し拝むでしょう」(詩編22:27)と告白しています。この御言葉のように、失われた大勢の人々が神様に帰る「福音のラッシュ」が起こることを祈り願います。†





＊今日のマナ

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。(第 I コリント 6:19)

人々は道徳と修養によって人格を磨き、自分を変化させることができると考えています。しかし、それは大きな勘違いです。人は最初から器として作られているため、どの人もその器に入っている内容物を変えることはできません。

神様がアダムを造られたとき、アダムという器の中には、神様に仕えて敬うという性質が入っていました。しかし、サタンの誘惑を受けて墮落したアダムの中には、呪いと死と病気が盛られるようになりました。

そのため、人が暮らすところには争いが絶えず起こり、人々はお互いに憎み、額に汗を流して働き、病気に苦しむようになりました。人間の品性は悪魔に似て、誰もが破壊的で否定的な面を持つようになりました。この世のどのような人であっても、自分の性格や運命を変えることはできません。

しかし、イエス・キリストが来られ、サタンを縛って、その権威を打ち破られました。私たちは、イエス様を救い主として信じて、



器

チョウ・ヨンギ
ヨイド純福音教会元老牧師



口で告白すると、我という器の中に神様の世界が入り始めます。

生まれ持った性格が冷たくて他人を愛せなかった人でも、神の愛を器の中に入れるのであれば、その人は変わります。神様は愛なので、この愛さえあれば、私たちは誰でも愛することができます。また、正直で真実になることを願うならば、真理の御靈である聖霊様を私たちの中に迎え入れればいいのです。

完全なるお方である神様が入っていれば、私たちの人生は成功となります。喜びである神様を迎え入れれば、常に健康になります。そして、救い主であられるイエス様を迎え入れれば、永遠の命を得ることができ、すべての落胆と絶望が退いて、新しい希望が近づいてきます。

私たちは器にしか過ぎません。器には何でも盛ることができます。その器に父なる神様を入れましょう。そうすると、私たちは神様が共におられる神殿になります。これからは、私たちの代わりに成し遂げられる神様を心の中に迎え入れて、私たちの性格と環境、運命を神様に変えていただきましょう。

今、緊急でしなければならないことは、神様が私の靈と魂と肉を完全に占領するよう、歓迎し迎え入れることです。†



愛の実践

——マルコによる福音書2章1～12節——

幾日かたって、イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立ったので、多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言られた。ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言

い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言られた。すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

記者がシュバイツァー博士に『何故、祖国にいれば有望な将来があるのに、アフリカのガボンまで行って貧民治療に専念するのか』と質問したとき、博士は『自分は家族や友人や社会、何よりも父なる神様に対し大きな負債を背負っているから、少しでも借りを返すためだ』と答えました。神学博士、哲学博士、医学博士、音楽家（バッハの研究家でもあり、自らがパイプオルガニスト）でもあった博士は、御言葉を通して人生の意義はこの負債を返すことにあるのを悟ったのです。私たちも負債を背負いながら生きています。特に、御子をさえ惜しまずに捧げてくださった父なる神様に返すことのできない負債を負っています。私たちの力では返すことのできない負債です。ユダヤのタルムードに「借りの有る者たちよ、力を合わせてあなたがたの隣にいる人にその借りを



返しなさい」とあります。だとしたら、私たちにできることは、隣人にその借りを返すことになるはずです。

本文に出て来る中風患者の4人の友は『自分たちにはこの病を癒す力はないが、イエス様のもとに連れて行けば必ず癒されるはずだ』と、友人を助けてあげるという傲慢な心ではなく、愛を実践するために決断をしたのです。隣人に対して私たちがしてあげられることはたかが知れています。でも、イエス様のもとに連れて行けば、イエス様が解決してくださいます。隣人愛で求められる第一の要素は、イエス様だったら癒してくださり、問題も解決してくださるという揺るぎのない信仰です。そして想うだけでなく、その通りに実践することです。ヤコブは「行いのない信仰は死んだものである」と常々語っていました。もし、4人の友人が『主が助けてくださるはずだから、祈ってあげるだけでよいではないか』という想いをもったとしたら、中風患者を寝台に載せてイエス様に会いに行くことはなかったはずです。彼らには熱い想いとイエス様に対する揺るぎのない信頼がありました。そして、実践したのです。助ける決心をしたら行動が伴います。『助けたいが、方策がない』との弁明は単に『助ける心』がないだけです。

4人が到着するとイエス様のおられる家の中はもちろんのこと、家の周りは人垣でいっぱいでした。4人は当惑したはずです。しかし、彼らにはイエス様に対する信頼と友を助けたいとする情熱がありました。そこで彼らは創造的かつ無謀な行動に出ます。屋根に登り、屋根を剥がし、そこから寝台ごとイエス様の前に吊り降ろしたのです。イエス様の反応は、「イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、『子よ、あなたの罪は赦された』と言われた」(本文2:5)でした。律法学者たちはこの発言に興奮して心の中で批

判します。無理からぬことでした。人が人の罪を赦すことはできないことを知っていたからです。彼らの過ちは、イエス様が神であられることを知らなかったことです。

実際、4人と中風患者にとてもイエス様の答は期待したものと違っていました。彼らは、病の癒しだけを考えていたからです。しかし、ここに奥義があります。イエス様がこの地に来られたのは、私たちの罪を赦すためであり、そのために十字架に従順されたのです。最優先事項は罪の赦しにあります。だからこそ、イエス様は4人の信仰を見て『罪赦された』と宣言されたのです。まずは、根本的問題の解決をしなければならないからです。そしてその後、イエス様は『あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ』と宣言されたのです。イエス様は私たちに善きサマリヤ人になれと言われます。サマリヤ人は躊躇することなく瀕死の重傷者を介抱しました。サマリヤ人は自らが罪人であることを悟り、その借りを返す方法を知っていた人です。靈的な救いへ導く伝道とともに、私たちクリスチヤンがなすべきこと、それは隣人の肉的必要も満たしてあげることです。隣人愛は、私たちが借りを返すことのできる唯一なる方法だからです。†

マルティン・ルターとヒトラー そしてユダヤ民族の受難（1）

キム・ジョンチョル | www.bradtv.net



キム・ジョンチョル監督は映画「回復」「許し」「第三聖戦」「ルターの二つの顔」等を作ったキリスト教ドキュメンタリー映画の監督で、イスラエル中東の専門家です。特に『回復』はモナコ国際映画祭でドキュメンタリー部門のグランプリを受賞し、『ルターの二つの顔』はLAマインドフィールド映画祭でドキュメンタリー部門のプラチナム賞を受賞しました。現在はイスラエル宣教の専門放送「ブラッドTV」を7年間運営しています。

民族全体の絶滅という悲劇的な大事件を何度も経験しても生き残った民族が、人類史にどれだけあるだろうか。世界史をみてみると、他民族や国家から侵略を受けて民族が完全に消えてしまうか、あるいは吸収・統合されて少数民族に転落してしまった場合がほとんどである。ほぼ唯一といえる例外的な事例はユダヤ民族である。それには他の民族とは異なる特別な理由がある。

■ユダヤ人の受難と粘り強い生命力

聖書には、ユダヤ民族が危機に直面した2つの事件が書かれている。エジプトのパロはエジプトを脱するユダヤ人を抹殺するために軍隊を送った。しかし、神はモーセを通して紅海が割れる奇跡を行い、追ってきたエジプトの軍隊のほうが紅海で溺死してしまった。これは最初の危機であった。



アハシュエロス王の統治12年、ペルシャ帝国の大臣ハマンがユダヤ民族を滅ぼす計画を企てた（エステル記3:6）。しかし、モルデカイとエスティルが死を覚悟した信仰の決断をすると神が働き、逆にハマンとその一族が皆殺しにされた。本当にドラマチックなどんでん返しであった。

その後、北イスラエルは強力な軍事大国アッシリヤの侵略を受け、3年間の包囲に耐え切れず、紀元前721年に首都サマリヤが陥落して完全に滅亡。貴族と多くの人々が捕虜となった（II列王記17:3~6）。

さらにアッシリヤはこの地域にアッシリヤ人を移住させる通婚政策を実施したため、ユダヤ民族の血統と宗教的伝統が次第に消滅していった。約140年後、ユダヤ民族は再び決定的な危機を迎える。生き残った南ユダ王国も神に逆らって偶像崇拜し、背教に



クロスの勅令が刻まれた円筒形の粘土土器（キュロスシリンダー）

よって神の怒りによる裁きを受け、紀元前586年にバビロンによって滅ぼされたのである。この時、バビロンとその後を継いで強力な帝国を建設したペルシャによって、ユダヤ人は跡形もなく消え去るところだった。

ところが、ここで驚くべき奇跡が起きる。預言者エレミヤを通して預言されたように（エレミヤ 29:10）、神はペルシャの王クロスの心を動かし、ユダヤ人たちをバビロンでの奴隸生活から70年ぶりに解放・帰還させることで、神殿を再建し、民族を維持できるようにされたのである（エズラ 1:1～3）。

■「キュロスシリンダー」と神のみわざ

長い間、エズラ1章1-3節の記述に疑問を抱く学者が多かった。しかし、「クロス勅令」が刻まれた円筒形の泥土器（別名キュロスシリンダー）が、1879年にバビロン南部にある寺院の壁から発見されたことで、聖書の記録が歴史的事実であることが証明され、それまでの疑問はすべて消えた。約2400年ぶりに日の目を

見た貴重な遺物であった。

イエスがダビデの子孫としてこの地に来られるという預言と約束の御言葉を実現するために、神がユダヤ民族を存続させたのではないだろうか。しかし、それだけでは十分な説明にはならない。イエスが十字架で死なれ、復活して昇天されたあとも、ユダヤ民族は依然として粘り強い生命力を見せていているからである。

ローマによってエルサレムが完全に破壊され（AD70年）、ユダヤ民族が全世界に散らばり、誰もがもはやユダヤ民族は終わったと考えた。しかし、彼らは二千年ぶりに失った土地を取り戻してイスラエルを建国することで、世界史に再び登場することになった。1948年5月14日、この日が来るまで、ほとんどの人が不可能だと思っていた、旧約聖書に記された預言は、人間の考えを越えて奇跡のように成就したのである。

世の中の人々はユダヤ民族が滅亡寸前から生き返る理由を、人間的な観点で探そうと努力しているが、これは無駄骨に過ぎない。神の働きは、聖書に記録された預言を通して理解しなければ、または聖霊の助けをいただいて信仰で悟らなければ、理解不能な「秘密の領域」であるからだ。

■ヒトラーとナチス・ドイツのホロコースト

ユダヤ人が受けた民族滅亡の危機の中で、最悪の事件はホロコーストであろう。第二次世界大戦中（1939～1945）、ヒトラーのナチス・ドイツはなんと600万人のユダヤ人を大虐殺するホロコーストを行った。

米アカデミー賞の授賞式で計7部門を受賞したスティーブン・スピルバーグ監督の映画『シンドラーのリスト』は、ホロコーストをリアルに再現した歴代最高の映画として知られている。老若男女を問わず収容所に連行されて無慈悲に殺害される場面を息を殺して見ていると、人間が集団的にここまで残忍になれるものなのか、驚かざるを得ない。近代啓蒙主義が花を咲かせた国であり、またルター派キリスト教徒やカトリック教徒が多いドイツで、そして天賦人権説が公認され、人権尊重の思想が広まっていた20世紀の欧州で、それも欧州全域でそのような残酷な出来事が集団的に6年間も続いたという事実は、実に理解に苦しむ出来事である。

では、ホロコーストの総指揮官だったアドルフ・ヒトラーとナチス・ドイツはなぜユダヤ人を滅ぼそうとしたのだろうか。いくら恐ろしい独裁政権だったとはいえ、どうやって特定民族の大量虐殺を計画し、それを実行に移すことができたのだろうか。

この事件についても、ありとあらゆる理由と説明が並べ立てられているが、事実と知識だけでは決して理解できない謎な部分があると思う。考えれば考えるほど、この闇の世界の統治者と天にいる悪霊、すなわち靈的な世界を握り、世の中を背後で操るサタンの影が浮かび上がってくる。

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もうもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の靈に対する戦いである。それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい」（エペソ6章12-13節）。



ニュルンベルク国際軍事裁判の現場資料写真

■ドイツの戦犯者に対する軍事裁判

第二次世界大戦が連合軍の勝利に終わったあと、1945年11月20日からドイツのニュルンベルクで戦争犯罪者に対する国際軍事裁判が開かれた。連合国はナチス指導者の蛮行を暴露すると同時に、ヒトラー時代に行なわれたユダヤ人に対する憎悪心の助長と大量虐殺を白日の下に晒そうとしたのである。

この裁判は、ドイツによるポーランド侵攻からの6年間で約5千万人が死亡した人類史上最悪の戦争を起こしたことに対する厳重な責任を問う裁判であり、同時にホロコーストという前代未聞の反ユダヤ主義に対する審判の場でもあった。

全世界の人々の注目が集まった法廷の被告人席には、ナチス・ドイツの核心党員であり、政治家であり、ジャーナリストだった

ユリウス・シュトライヒャー (Julius Streicher) が座っていた。彼はナチスの反ユダヤ主義新聞『シュテュルマー (= 突撃隊)』の編集長を務め、反ユダヤ主義を宣伝し、ヒトラーのユダヤ人大虐殺の広報・扇動を担当した人物であった。

精神科医たちは、シュトライヒャーについて精神的に極めて正常、あるいは「ユダヤ人」に対する極端な憎悪の念を持っていると証言した。裁判長が被告人に尋ねた。

「どうしてあなたは人間としてそんなに残忍なことができたのか」

その時、シュトライヒャーは自分はユダヤ人を直接殺したことではなく、連合軍によって収監されてから大量虐殺について知ったと虚偽で弁明した。また、自分の演説と新聞に掲載した記事はドイツ人を扇動するためではなく、「ドイツ人に情報を提供し、彼らに何が喫緊の課題なのかを強調するためだった」と強引な主張をひたすら繰り返した。

■シュトライヒャーのおかしな発言とマルティン・ルター

だが、検事は被告人の有罪事実について、次のように指摘する。「被告シュトライヒャーは、ドイツと占領地の600万人にのぼる男女、そして子どもとユダヤ人に対する弾圧の従犯です。彼が責任を持つ新聞や雑誌、その他の出版物による宣伝と扇動は、ユダヤ人に対する狂信的恐怖と憎悪を駆り立て、大量殺人を正当化するために計算されたものでした」 - ニュルンベルク法廷の判決文中から引用

裁判所はシュトライヒャーに死刑を言い渡し、1946年10月16日、絞首刑が迅速に執行された。参考までに、反ユダヤ主義の宣伝と扇動を担い、一時期80万部を刷ったほどヒットした『シュテュルマー (= 突撃隊)』に掲載された記事 (1943年11月4日付) の一部を確認しよう。

「ユダヤ人はヨーロッパから消え、数世紀にわたりヨーロッパ人を苦しめてきたユダヤ人の”東部貯水池”の存在が終わったのは事実だ。しかし、戦争が始まつた時、ドイツの指導者ヒトラー総統はすでに今起きていることを予言していた」

本当に良心のとがめがなくなった人間のむごたらしい言葉である。しかし、裁判中、シュトライヒャーは次のようなおかしなことを言った。

「私を裁判する前に他の人を呼んで裁判をし、彼が有罪判決を



反ユダヤ主義の新聞を発効したシュトライヒャー



映画『シンドラーのリスト』の一場面



運動場に集結している強制収容所のユダヤ人たち

受けたら、謙虚に私の罪を認める。私はマルティン・ルター博士の書籍を読んだことがあるが、彼の本がこの裁判と関連があるとすれば、今日この席に同席しなければならないのは、まさにマルティン・ルター博士である」

驚くべきことに、シュトライハヒヤーが召喚した人物は他ならぬマルティン・ルターだった。

なぜ、シュトライヒヤーは偉大な宗教改革の主人公だったマルティン・ルターの名前を口にしたのであろうか？ 彼らのホロコーストという犯罪行為とマルティン・ルターとは果たしてどのような関係があるのだろうか？ †（次号に続く）

* ユ・ジョンオク牧師婦人の信仰物語

花のない遺体安置所



私が幼い頃、外で走って遊んでいると、転んで膝を怪我してしまい、血が出たことがあります。幼い頃は、血が出ると死ぬかのように怖がっていましたが、今考えてみれば、怪我の痛みよりも、血そのものを怖がっていたと思います。おいおい泣きながら家に帰ると、母は傷口に薬を塗りながら、「神様がジョンオクを愛しておられるね」と不思議なことを言いました。

良い成績を取ったり、賞を貰ったりする時に、「主が愛している」と言わされたら意味がわかります。ですが、転んで血が出ていた時に「主が愛している」と言われても、まったく納得できませんでした。そのため、「神様が天使を送って、私が転ばないように守ってくださることが愛なんだよ。転んで血が出るまでほっておくのは愛じゃない」と母に激しく言い返しました。

それ以降も、母は、私が成功した時よりも失敗した時にこそ、「神様が愛している」と言います。そして、私が青年になった時には、「神様があなたに与えるものが、失敗や苦痛だとしても、それはあなたを愛する神様があなたのためにくださった最高の贈り物だ」と、母から言わされました。

私が失敗や苦難の中にいる時、母が聞かせてくれた御言葉は、申命記8章15-16節「あなたを導いて、あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通り、あなたのために堅い岩から水を出し、先祖たちも知らなかつたマナを荒野であなたに食べさせられた。それはあなたを苦しめ、あなたを試みて、ついにはあなたをさいわいにするためであった」でした。

母は聖書を開いて読んだあと、「ジョンオク！　私たちが歩む道は常に緑の牧場、いこいのみぎわじやないかもしだれない。むしろ、へびやさそりがいる危険な荒野、水のない乾いた地かもしだれない。しかし、どこにいても、神様が導いてくださる道だと信じなさい。神様があなたを低くされる時、へりくだらなければならぬ。神様があなたを低くされる理由は、あなたに祝福を与えるためだから」と言ってくれました。

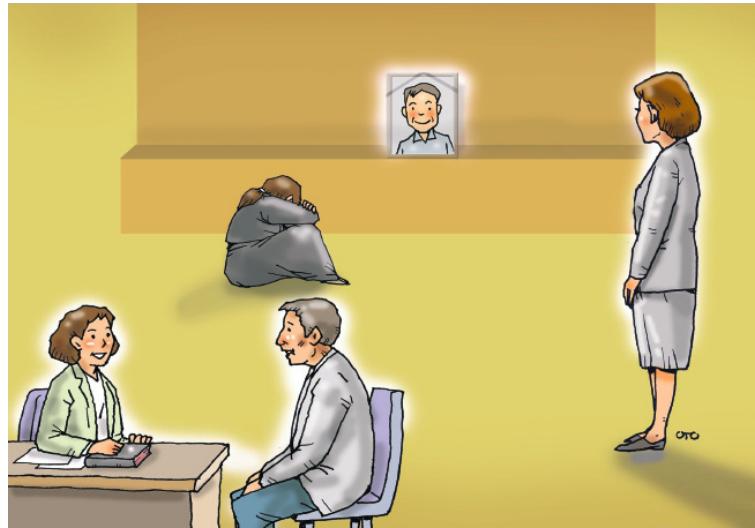
この母の言葉が私の心から離れたことは一度もありません。約30年前に主から韓国の清平（チョンピョン）にある「大切な人たちヒーリングセンター」に関するビジョンをいただいて、主と共にその道を歩み始めてからも忘れたことがありません。そのためなのか、癌患者を見る時、私の目線ではなく、神様の目線で見るようになりました。

人生の中で最も祝福された出会い

私の胸をいつも締めつける遺体安置所があります。ソウル駅の地下道路で無料の食事を配っている時に出会ったあるホームレスが置かれた遺体安置所です。彼は、子どもが母親についていくように、私の後について来ました。そして、成り行きで「大切な人たちセンター」に入所しました。

しかし、「大切な人たちセンター」での生活に慣れず、田舎暮らしを望んでいた彼は、清平の「大切な人ヒーリングセンター」が完成する前に、清平に移住しました。春になると山菜やキノコを、秋になると栗や松の実をリュックに入れて、ソウルまで持つてきました。そして、ホームレス教会で主日礼拝を捧げることに、幸せを感じていました。すでに癌を患っていた彼は、ある日、私に信仰告白をしました。

「人生には大事な3つの出会いがあるそうです。その出会いとは、小さい時は良い親、成人になってからは良い配偶者、老いてからは良い子供との出会いだそうです。私はこの3つとも良い出会いに恵まれませんでした。しかし、今は、私の人生で最も祝福された出会いがあります。それはイエス様との出会いです。癌が

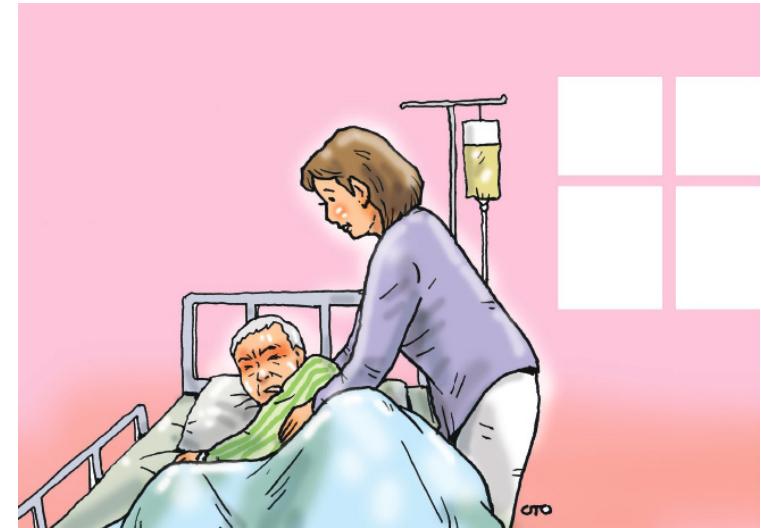


かなり進行しており、主のところへ行く日はもう間もなくです。イエス様と出会わせてくれて、ありがとうございます。では、天国で会いましょう」

それから数日も経たずに、彼は天に召されました。私は彼の遺体安置所に行きました。妹一人だけがそこに座って、一生結婚もせず、彷徨いながら生きてきた兄を恨んでいました。誰も訪れず静かな遺体安置所に置いてある、明るく笑っている彼の遺影写真を見ました。

「主に抱かれて、そのように笑っているのですね」

しばらくの間、彼と心で会話をしていました。そして、生まれて初めて花屋に行って、献花を注文しました。



「送り先は九里（グリ）市にある○○病院の葬儀場○○号です。菊ではなく、最もきれいなバラでお願いします」

一番素敵に生きる人生

数日前、ある癌の患者が主の御許に旅立ちました。その患者は全身に癌が広がり、特に膀胱癌がひどくて、両側の腎臓に排尿のためのチューブが挿入されていました。夜になると、癌の痛みで病院全体が響くぐらいうめきました。

初めて出会った時の彼は、神様への恨みでいっぱいでした。しかし、日が経つにつれて、「大切な人たちヒーリングセンターは家族であり、ここに入ってから、笑えるようになった」と、幸せそうに言うようになりました。礼拝を求めていた彼はイエス様を受け入れて、神様の子供となりました。

家族がいない彼にとって、他の患者は親であり、兄弟であり、姉妹だったので、お互いに世話をし合っていました。彼は「ヒーリングセンター」から離れたくなく、最後まで病院に行かず、痛みを耐えながらなんとか頑張っていました。

彼は総合病院に移されてから一週間後に天に召されました。その病院に設けられている遺体安置所に行きました。寂しい遺体安置所には、普段連絡も取らなかった彼の兄だけがいたのです。彼は結婚もしていなかったので、妻も子供もいませんでした。遺影写真の中の彼は、若い時の健康な顔で笑っていました。彼の声が聞こえてきました。

「先に天国に行って待っていますね。私を愛してくれた、私が愛する大切な人たち、天国で会いましょう」

花のない遺体安置所とは違って、主が天国中を花で満たして彼を迎えてくださったと思います。

この世で必ず出会わなければならない方は、イエス・キリストです。この方に出会って、この方を受け入れた人は永遠の命を得ます。この世でどのような身分であったか、どれほど財産があったのかは問題ではありません。遺体安置所に花一本なくとも大丈夫です。イエス・キリストと出会ったなら、一番素敵なお人生を生きたことになるのです。†

＊靈的リーダーシップ

イ・ヨンファン 牧師／ヨイド純福音教会

ゆるしの奇跡



ジョエルのゆるし

『ジョエル：世の中で最も美しい人』の著者ジョエル・ソネンバーグは、1979年に高速道路でのひき逃げ連続追突事故により、全身に重度のやけどを負いました。当時、生後20ヶ月に過ぎ

ぎなかったジョエルは、車の中で文字通り黒焦げになったのです。救急車で運ばれてきた幼いジョエルを見た医師は、「生存確率10%」という診断を下しました。赤ちゃんは生きられないだろうと、誰もが不憫に思いました。しかし、ジョエルは周囲の予想を覆し、奇跡的に助かりました。

しかし、事故後の彼の人生はとても悲惨でした。手術だけで50回以上あり、その長くて苦しい病院生活をどのような言葉で表現できるでしょうか？ 1回の手術だけでも大きな苦痛ですが、ジョエルはなんと50回以上も手術を経験し、長くて苦しい病院生活を送りました。

ジョエルには子供時代を病院で過ごした記憶しかありませんが、彼はいつでも夢と希望を失いませんでした。そのおかげで、指もつま先もないジョエルでしたが、小学校に入ってからはサッカーとバスケの選手として活躍し、中高生の時にはMTBとクレー射撃の選手として有名になりました。それだけでなく大学にまで進学しました。

米国テイラー大学を卒業後、彼は神学校に進み、修士課程を修めます。そして、世界中に希望のメッセージを宣べ伝えているなか、あの事故から逃走していたトラックの運転手が逮捕され、法廷に出頭しました。ジョエルはその加害者を快くゆるしてこう言いました。

「私は憎悪で人生を無駄にしません。憎しみは別の苦しみを生みます。私は神の恵みの中にある無限の愛に包まれて生きていきたいです。私は加害者をゆるします。そして、私の外見をあざけ

る世の中も喜びをもってゆるします」

ゆるしは神の恵みに属するもの

ゆるしは信じられないほどの奇跡をもたらします。使徒パウロはゆるしについて、このように勧めています。

「もしあなたがたが、何かのことについて人をゆるすなら、わたしもまたゆるそう。そして、もしわたしが何かのことゆるしたとすれば、それは、あなたがたのためにキリストのみまえでゆるしたのである」（Ⅱコリント2:10）。

「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい」（エペソ4:32）。

ジョエルを取り上げた米国CBS TVのドキュメンタリーパーティー『パブリックアイ』は、アメリカのテレビ界最高の賞であるエミー賞を受賞しました。

ジョエルは「障害は神の贈り物」だと言います。「人は自分の本分を正確に悟ると、どのような状況でも満足できます。私は多く奪われましたが、むしろそれ以上に与えることができています。人々は失敗と損失を経験します。しかし、神様は、失ったものよりもさらに多くのものを与えてくださいます。今日の私の勝利は、私や家族がすばらしいからではなく、私の中におられる神様がすばらしいからです」

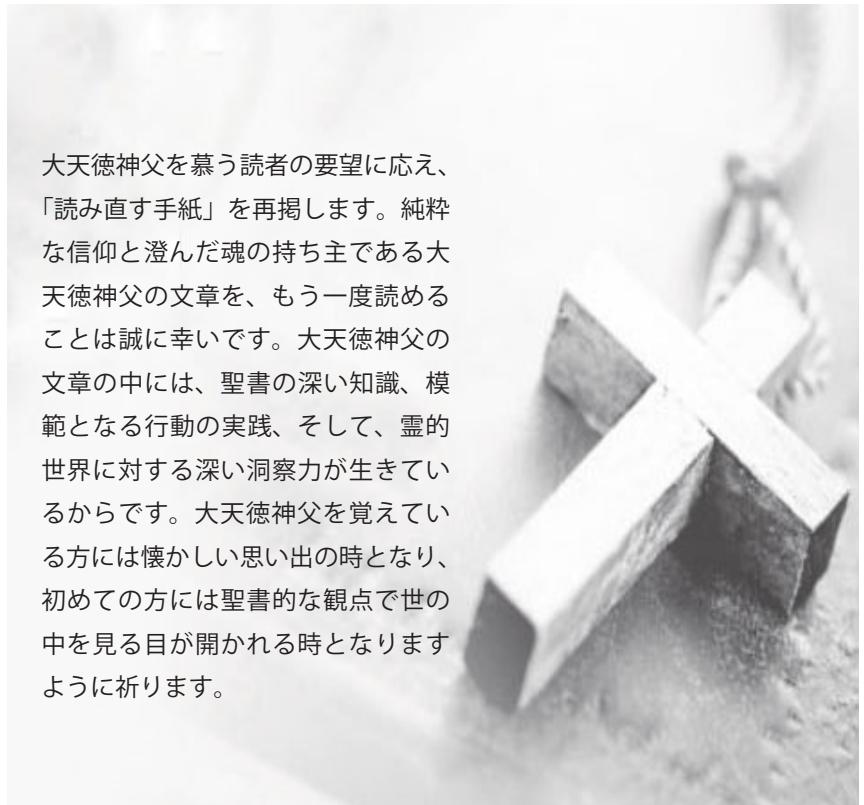
あらゆる逆境の中でも信仰を決して離さずに生きてきたジョエルは、ひどい苦難の中でも希望を見出し、その希望のメッセージを私たちに伝えています。ジョエルは苦難の中でも、むしろ「世界は美しく、障害は神の祝福」と宣言しています。聖書の御言葉通り、患難が祝福になったのです。

「それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は鍊達を生み出し、鍊達は希望を生み出すことを、知っているからである」(ローマ 5:3-4)。

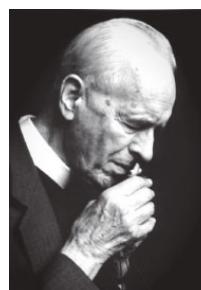
ゆるしをこの世の論理で理解することはできません。神の恵みに属するからです。加害者や周囲のあざける者をゆるすジョエルの告白を通して、イエス・キリストの贖いの恵みを受けた者が享受する真の喜びを発見することができます。

世の中の喜びは、環境が満たされたときに訪れる一時的なものです。しかし、神の子である私たちがキリストの中で味わうゆるしの恵みと真の喜びは、ジョエルの告白のように、私たちの中におられるすばらしい神様のゆえに可能となるのです。†

＊読み直す手紙



大天徳神父を慕う読者の要望に応え、「読み直す手紙」を再掲します。純粋な信仰と澄んだ魂の持ち主である大天徳神父の文章を、もう一度読めるることは誠に幸いです。大天徳神父の文章の中には、聖書の深い知識、模範となる行動の実践、そして、靈的世界に対する深い洞察力が生きているからです。大天徳神父を覚えていける方には懐かしい思い出の時となり、初めての方には聖書的な観点で世の中を見る目が開かれる時となりますように祈ります。



デ・チョンドク神父 (R. A. Torrey 三世)

918年、中国山東省で長老教会のアメリカ人宣教師の息子として生まれ、中国と平壤で幼年時代を過ごしました。アメリカのプリンストン神学校で学び、聖公会に席を移したあとは、1949年に聖公会の司祭となりました。1957年に韓国に来て、2002年に召天するまでの45年間、韓国で主の働きをしました。1965年、江原道太白市にイエス院を設立して活動しているうちに有名になり、聖靈論と共同体に関する教えを通して、韓国の教会とクリスチヤンに大きな影響を与えました。

私たちはどうして神様の御旨を悟れないのでしょうか？



“ 大天徳神父

神様の御旨を悟って、苦しくてもその義に従うと、喜びと平安が訪れる体験を常にしています。しかし、友人は、なぜか神様の御旨を見つけられず、導きを受けることもできず、その結果、私が受けている喜びや安らぎも得られなっています。彼らはまるで舵のない船のように方向を決められないだけでなく、恐ろしい災難にあわないかと不安になっています。大天徳神父、なぜ人々は神様の意思を悟れず、その義に導かれることなく、さまよっているのでしょうか。 - チュ・ボクチュ拝上

”

愛するボクチュ姉妹へ

姉妹がキリストに従い、毎日主の導きに従って暮らしていることを大変嬉しく思います。しかし、主が導かれるのは、姉妹のような順調な道とは限りません。私は険しい道を歩んできましたし、これからも歩むでしょう。姉妹がおっしゃっているように、私たちには導いてくださる素晴らしい神様がいるので、本当に幸いです。

イエス院に私を訪ねてきた一人の若者のことを今でも覚えています。彼は「どんなことがあっても、神様の御旨なら喜んで従います」と言い、聖徒たちの前で、自分の命の尽きる時まで、忠誠心のあるキリストの僕になることを誓いました。また、「神様が自分をイエス院の終身会員として導かれたことを知っている」とも言いました。

しかし、何ヵ月か経ったある日、その兄弟は私のもとへ来て、「神父様、私はイエス院を離れようと思います」と言いました。私は彼に「兄弟はここで献身するように、神様が自分を呼んでくださったと言っていましたし、神様の御旨なら喜んで従うと約束しましたか」と尋ねました。すると彼はこう言いました。「はい、約束しました。でも、私はそれがこんなに大変だとは思いませんでした」

「身を捧げる献身」と「身を貸す献身」

この言葉によって、あの兄弟がキリストの忠実な献身者になると、言った時、彼は嘘をついていたことがわかります。彼は、悪靈との戦いに楽しさと栄光がついているうちは約束を守り、苦難と逆境にあつたら辞めるつもりだったのです。

つまり、彼の誓った献身は「身を捧げる献身」ではなく、「身を貸す献身」だったのです。貸すということは、所有権（決定権）を自分が持っているため、いつでも権利を主張して、自分の好きなようにできることを意味します。

彼は「神様の御旨であれば従う」のではなく、「神様の御旨が私の意思と同じなら従う」という心構えだったのです。

神様はこのような人には、それ以上道を示したり、導いたりされることはできません。神様は、無条件に従う準備ができている人にだけ、指示や命令をくださいます。

聖書には次のような神様の約束が与えられています。
どのような人が約束を得られるのでしょうか？

「わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。あなたがたの知っているとおり、信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである」（ヤコブの手紙 1:2-3）

つまり、難しい試練に直面しても逃げずに耐え、さらにはそれを喜びとして受け取れる人が約束を得られるのです。

「ただ、疑わないで、信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない」（ヤコブの手紙 1:6-8）

愛するボクジュ姉妹、今日、聖徒の大半は、二心を持っているため、残念に思います。彼らは自分に仕えながら、もう一方ではイエスに仕えたがります。だから、風の吹くままに打ち寄せる海の波のような生き方をしています。今日のアメリカ社会にも、このような風が絶え間なく吹き荒れています。世論の風、文化の風、変革の風がまさにそれです。そして、多くのクリスチヤンがこれらの風に押し流されているのが現状です。

「この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを完全にし、不動にする錨であり、かつ『幕屋の内』にはいり行かせるものである」（ヘブル人への手紙 6:19）

このような人々は、イエス様が再臨されることを待ち望んでいませんし、「最後の勝利」など考えてもいません。ただ、今に執着するだけです。あるいは、ロトの妻のように世と肉をあきらめた自分の決断を後悔することもあります（肉の聖書的な意味は、個人主義、自己中心主義、古い自分に戻ろうとする傾向を意味する）。

神の御旨を行うという決心

「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネによる福音書）

「わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである」（ヨハネによる福音書）

それゆえに神様の御旨を行うと決心しているかによって、神様の御旨を知るようになるのであり、好奇心や他の動機で神様の御旨を知ろうとするならば、それは無駄なことです。繰り返し言いますが、人々が神様の御旨を発見できないのは、神様が御旨を見せてくださらないからではなく、神様の御旨に従う決心ができないからです。

ボクジュ姉妹、私たちの主人は誰ですか？ キリストです。あ

の方が私たちに与えられた本分は何ですか？　自分を諦めて神様の御旨に従うことです。もちろん、私はこれがどれだけ難しいことかをよく知っています。さらには、「楽に暮らせるのが最高」という世の中の風潮が教会にまで流れている今日では、特に難しいことです。

この世の風潮を批判する漫画がアメリカにありました。その漫画には、結婚式を執り行う牧師が新郎新婦に誓約を誓わせる場面があり、その牧師からの質問が傑作でした。

「花嫁の〇〇さん、困難が二人を引き裂くまで、あなたはこの人をあなたの夫としますか？」という内容でした。もちろん、「死」が二人を引き裂くまでと言うべきだったのを、漫画家が風刺するために変えたのです

今日の世界は、キリストの花嫁であるクリスチャンにも、このような誓約をするように求めています。「花嫁のクリスチャンさん、苦難が二人を引き離すまで、あなたはイエス・キリストに従いますか？」悲劇的なのは、ここで「はい」と答えるクリスチャンが増えているという事実です。

人々が神様に自分を委ねてついて行くと、神様は御旨を示され、その通りに導いてくださいます。人々は二心を抱かず、ただ委ねて聖霊様の助けを求めるだけです。このような人だけが神様の御旨を知り、試練と苦難を勝利に変えて打ち勝ち、神様に栄光を返すことができるのです。†

* イ・チョルファンの幸福

コミュニケーションの秘密



去年の秋、両親の家に向かう途中の出来事でした。実家の近くの遊び場では、一人の男の子がブランコに乗っていました。背の低い女の子がブランコに乗っている男の子をうらやましそうに見ており、その女の子は弟と手をつないでいました。ブランコは四つあったのですが、乗れるブランコは一つだけでした。誰かがいたずらをしたのか、ブランコを吊り下げている柱にブランコが巻き付けてあったのです。どういうつもりだろうと思いながらも、私はその遊び場を通り過ぎました。

呼び鈴を押すと、父が門を開けてくれました。母が外出しているため、父が一人で夕飯を食べていました。亡き祖父の古い漢詩集が食卓の横に広がっていました。私は父から少し離れた所に

座っていましたが、一人でご飯を食べている父の姿が不憫に思えてきました。貧しかった父は、食事に文句を言うことはありませんでした。食事を終えた父が散歩しようと誘ってきたので、私は応じました。天気は晴れなのに、父は傘を持って出かけました。私は怪訝な顔つきで父に尋ねました。

「お父さん、このあとに雨が降るのですか？」
「いや、他にちょっと使い道があるんだ」

それ以上は聞かず、父について行きました。先を歩いていた父が遊び場で足を止め、ブランコのところに向かい始めました。父は傘を高く持ち上げて、上の柱に巻き付けてあったブランコを一つずつ元に戻しました。私はただ突っ立って父を眺めるばかりでした。私が何もせずに見過ごしたブランコを、父は直していました。

口先だけでなく真心と行動で

父と私とでは生き方が違っていました。私は身近な人だけを愛しました。馴染みのない人の痛みと寂しさは、私には無関係でした。これまでの私は見たいものだけを見ようとし、目に見えるものだけを信じようとした。父は私と違いました。父はあらゆるものを見つめ、それを抱きしめました。

ある日、父と一緒に裏山を散歩しました。雁の群れが空高く飛んでおり、雁の群れを眺めながら父が私に言いました。

「雁の群れを見ると、子どもの頃を思い出す。私の故郷では百万匹を超えるアトリの群れを見ることができた。本当に壯觀で、多数の鳥が群れをなして空をあちこち飛び回っているのに、ぶつかって落ちる鳥はいなかった。あの鳥たちが、どうしてあんなに一糸不乱に動けるのか不思議だったが、秘密は簡単だった。横にいる鳥との衝突さえ注意すれば、100万羽を超える鳥が、互いに衝突しないことがわかった。アトリたちは、コミュニケーションの秘密が『配慮』だということを知っていたと思う」

父は何気なく遠くの空を眺めていました。アトリの群れの話をして、父は私を慰めたかったのです。コミュニケーションの問題で私が悩んでいることを父は知っていたのです。「意思疎通は言葉ではなく、真心と行動です」と、父は私に言いました。「人とのコミュニケーションでは、まず私を捨てなければならない。私を捨てなければ一握りの真実も得ることができない」と、父は続けました。父は私が人生の課題に直面するたびに、人生経験を通して得た知恵を教えてくれたのです。†

イ・チョルファン |

小説家。430万部のベストセラー『練炭道1、2、3』をはじめ、『幸せな古物商』『慰労』『どうやって人の心をつかむのか』『イエスを信じれば幸せになれるでしょうか』など23冊を執筆。作品のうち10編が小学校と中学校の教科書に引用され、ミュージカル『練炭道』の台本は高校の教科書にも掲載。2000年から印税で運営されてきた「練炭道の分かち合い基金」を通じて、社会的弱者の人々を支援中。

八日目の秘密



私たちがこの世で祭司として完全に立てられるならば、いかなる状況や場所においても礼拝を捧げられます。私の信仰が自分自身のためだけでなく、多くの人の生命を生かす八日目に進むとなりました。「8」は7の次の数字です。当たり前の事実ですが、レビ記9章には「八日目」の話が出てきます。

「八日目になって、モーセはアロンとその子たち、およびイスラエルの長老たちを呼び寄せ」（レビ記 9:1）。

一週間は7日区切りで繰り返します。第七日の次に新たな第1日が始まります。ところが、レビ記には、祭司を立てる任職式にまつわる特別な秘密が書かれています。

数字「7」が完全さの象徴であるならば、「8」は次の段階である「永遠への招待」を表しています。祭司の任職式は7日間行われますが、それで終わりではありません。世界的に通用しているギリシャ式では時間は一直線に流れていくものだと考えられています。一方、ヘブル的時間観では、時間は元に戻りますが、それは同じ地点に戻るのではなく、螺旋階段のように戻りつつも上がっていくものと考えられています。そのため、時間は繰り返すように見えても、発展しているのです。

一週間の中に八日目はありません。ユダヤ人は、曜日の区分として日曜日は第一日、月曜日は第二日…と数えました。七日目を安息日とし、翌日は新たな第一日に戻ります。しかし、突然「八日目」が出現したのです。創造の第七日が過ぎると、世界は八日目に進み、最初の祭司であったアダムから始まり、ノア、アブラハムなどの祭司が立てられました。

レビ記における八日目は、祭司が立てられた後に捧げる、新たな段階の礼拝を示しています。ヨハネによる福音書7章には「祭の終りの大事な日に」という時間が出てきますが、これがすなわち「八日目」、ヘブル語で「シェミニ・アツエレット（ שְׁמִינִית ）」です。この時、イエス様はエルサレム神殿で驚きの宣言をされました。レビ記に書かれている祭司の祭儀の核心をそのまま言い表した御言葉です。

「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』」（ヨハネ 7:37～38）

祭司とは「イエスを信じる者」です。聖書の約束は、その人の腹が生ける水の川の源流になるというものです。欲望の湧き出る腹が祭壇に変わり、生ける水の川の源流となる、これが祭司の生き方です。

互いのために集まる礼拝

遂に八日目から祭司による礼拝が始まります。罪祭と酬恩祭の礼拝が実際に捧げられます。祭司は民たちの罪のためにいけにえをたずさえ、イスラエルの民たちは祭司の清めのために雄山羊をたずさせてきます。そして、祭司と民たちが一堂に集まります。すべてが待ちに待った礼拝が始まる瞬間です。

最初に何をするのでしょうか。それは幕屋の入口に「集まる」とでした。祭司と民が互いのための献げ物を持って互いのために祈りつつ集まること、これが祭司の礼拝で起こることです。

以前にも礼拝はありました。アブラハムも献げ物といけにえを捧げました。しかし、全国民と彼らのための祭司が、互いのために集まる礼拝は八日目に初めて捧げられるようになりました。これは、祭司が民たちの罪のため、民たちは祭司の清めのため、互いに仕え合うことでした。

このように教会は、神の人々がイエス・キリストと互いのために集まる所です。今日、「神様を信じるのに教会が必要なのだろうか?」という考えが広がっています。そのため、神様を信じながらも、教会に出席しない聖徒が増えています。

神様を信じるとは、「集まる」と決断することと同じです。一人で神様を信じるのは不可能です。なぜなら、ひとりの神様を、ひとつの心で、ひとつの聖霊を通じて、私たちが連合することで、キリスト者は成立するからです。いかなる対価を払ってでも、私たちは共に集まり、一つの肢体としての連合をなすべきです。

「ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか」(ヘブル10:25)。

現代の個人主義は信仰の領域にまで入り込み、個人黙想、個人祈り、個人礼拝により、自分自身を他の人々から孤立させています。自分が恵みを受けければいいというような信仰は、キリストの道とは全く異なるものです。孤立は罪の結果なのです。

カインがアベルを殺して選択した生き方は、一人だけの城に閉じこもり、誰にも会わずに生きていくことでした。彼は、人々が自分を非難し、また彼らに傷つけられ、憎まれることを恐れ、人類初の城を築き上げ、そこで暮らしました。これが最初の「都市」です。私たちも都市の高層マンションに暮らし、他人と徹底に分離された所を安全だと思い込んでいます。しかし、これは最も危険な状態なのです。

レビ記では、罪に対する勝利は共同体を通して起こりました。誰かが罪を犯すと、それは直ちに共同体全体の罪になります。誰が病んでいると、それは共同体全体の苦痛になります。これが私たちが集まる理由です。教会は、孤立しつつある人たちにとって、最後に残った共同体の砦とななければなりません。互いの人生

を愛と善行をもって励まし合うことに尽力すれば、集まることの喜びを感じるようになります。

恐れに打ち勝つ愛

祭司の罪祭は、自分自身のためのものであると同時に、民たちのためのいけにえにもなりました。祭司の罪祭に続いて、民たちのための罪祭を捧げることが続きます。山羊のいけにえを捧げますが、山羊はヘブル語で「שׂׂעֵר サーイール」とい、これは「恐れる」という語源から出た言葉です。

「彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』」（創世記 3:10）。

罪は人を恐れに陥らせます。今日、実体のない恐怖が人を支配するのは、恐怖症に苦しむ人々だけではありません。私たちすべてに広がっている病のようなものです。恐れは罪につながっています。信仰はこの恐れから抜け出すことです。私たちの大祭司となられたイエス様は、この恐れを取り除くいけにえを捧げておられるのです。

「しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、『しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない』と言わされた」（マタイ 14:27）。

祭司が恐れを象徴する山羊を祭壇で焼き尽くすのは、民たちの恐れを消滅させるいけにえを捧げるためなのです。それは、私たちに向かうキリストの愛によって成し遂げられます。

「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである」（ヨハネ 4:18）。

恐れに打ち勝つのは勇気ではありません。『愛』です。愛が恐れに打ち勝つのです。私たちに向かうキリスト・イエスの愛、これこそが私たちを罪に定め苦しめる恐れの角を抜き取り、騒がしさや泣き叫びを静める火の燔祭の祭壇にいけにえを置くことになるのです。

私たちがこの世の中で祭司として完全に立てられるならば、いかなる状況や場所においても礼拝を捧げることができます。私の信仰が自分自身のためだけでなく、多くの人々の生命を生かす八日目に進むようになりました。家庭においても、祭司である父親が子どもたちを祝福し、子どもたちは父親のためにとりなしをする、お互いのための礼拝が捧げられるならば、それによって八日目が開くのです。†

発行：純福音東京教会 文書宣教会・しなんげ出版部

【翻 訳】：趙 榮珍 執事、李カレン 執事、林 俊秀 教育生、李 珍 執事、金原英興 按手執事、

朴 宰完 按手執事、青年部翻訳チーム、金澤由紀子 助士

【日本語校正】：垣内温子姉妹、篠崎 栄姉妹、今村和世 執事、吉田綾子 執事、向川 誉 執事、
澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再 編 集】：金澤由紀子 助士

【監 修】：武石哲夫 按手執事



しなんげ

11
2021

愛する者よ。
あなたのたましいが
いつも恵まれていると同じく、
あなたがすべてのことに恵まれ、
またすこやかであるようにと、
わたしは祈っている。(ヨハネ 1:2)

